
羅生門

有栖川 玲緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羅生門

【Nコード】

N8958Q

【作者名】

有栖川 玲緒

【あらすじ】

芥川龍之介の「羅生門」が引き起こす物語

彼女は病室の窓から空を見上げていた。窓を吹き抜ける風は彼女の長い髪の毛を靡かせ、風と共にいい香りが漂ってきた。空を見上げる彼女の顔は何処と無く寂しそうで、それでもって何か希望に満ち溢れているような、そんな顔だった。彼女の背中中は小さく、そして可憐で僕は彼女を後ろからギュッと抱きしめたい衝動に駆られた。何故だろう。それほど彼女が美しかったのだろう。

僕が彼女に見蕩れていると、そんな視線に気付いた彼女が僕に向かって、一冊の本を投げつけてきた。僕はその本を受け取ると、表紙を見つめた。表紙には、羅生門と題名が書いてあった。作者は芥川龍之介である。不思議そうに表紙を眺める僕に、彼女は空を見上げたまま言った。

「ねえ、羅生門。読んだことある？」

「ううん」

素直に答えた。すると、彼女は「読んでみて」と言った。

僕は、彼女に言われたとおりに表紙を捲り、小説を読んだ。

羅生門。

φ

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない――。

——外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。
下人の行方は、誰も知らない。

φ

たった8ページの短い小説だった。読み終えた僕の顔を彼女はジツと見つめた。どうしたのだろうか。僕の顔に何かついていているのだろうか。

「ねえ、どうだった？」

彼女は僕の顔を見つめたまま言った。小説の感想を聞いているのである。前にもこんなことがあった。確か、屋上で彼女に芥川龍之介の「蜜柑」を勧められた時だ。あの時彼女は何を言いたかったのか、僕には専らわからなかった。なんて、考えていると彼女の顔が見る見る膨らんできた。

「遅い……」

彼女は不機嫌に言った。

「感想……何ていうか、老婆が死人から髪の毛を取ってる理由が髪を作るって所に意外性があって面白かったかな」

「はあ？なにそれ」

彼女は僕の答えに満足しなかったのか、不機嫌そうな声を上げた。蜜柑の時だってそうだった。彼女は一体、どんな答えを待っていたのだろうか。僕は本を置くと彼女にも本の感想を聞いてみた。

「そつちこそ、感想は？前みたいに意味がわからないのは無しね」

僕が言うと、彼女は更に不機嫌そうな顔になった。意味がわからないと言われて怒っているのだろうか。そんな彼女の顔が凄く可愛かった。彼女は幸せそうな僕の顔をひょいと抓ると不機嫌そうなまま言った。

「どうせ、私が感想言ったってまた意味がわからないって言うん

でしょ」

彼女は可也ご立腹だった。僕はそんな彼女を宥めた。どのくらいの時粘っただろう。やっと彼女の機嫌が元に戻ったのだ。また、機嫌が悪くなる前に僕はもう一度彼女に感想を聞いた。

「うん。本当に人間って不思議だよね。老婆が屍と化した女性から髪の毛を抜いてた理由は鬘を作るためだったけど、老婆は死人から髪の毛を抜くことを何ら悪いこととは思ってない。そればかりか、されて当たり前って思ってる。理由はその死人たちが死んで当たり前的事をしてたに違いないから。老婆がどうしてそこまでして鬘に拘るのかと言うと、鬘を作らないと老婆自身が餓死してしまうから。そんな老婆に下人は、老婆と同じようなことを言った「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」と。本当に人間って不思議だよな」

彼女は一泊置くと更に続けた。

「羅生門ってね。最初は怖そうないメージだけど、最後の鬘の下りでどつと笑いが取れそうな、そんな話だけど、この話が伝えたいのは人間の怖さだと思うの。自分が生きるために他人を犠牲にするという考えに何も感じない下人。そればかりか、私には老婆から衣服を剥ぎ取ったときに可也喜んでるようにみえるもの。」

彼女はそこで口を止めた。そして、僕の顔をジッと見つめた。たった数秒だったであろう。そんなたった数秒もあの時は数十秒にも感じ取れた。それだけ彼女の目は真剣だった。そのまま、空を見上げる彼女。僕は、ただ黙って窓から空を見上げる彼女の横顔を見つめていた。一体、今、彼女は何を感じて、何を思っているのだろうか。僕には全くわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958q/>

羅生門

2011年4月6日13時05分発行